

友よ！来世でも会いたいね●

町田大介

一、悩むに時がある

副島孝の妻は八日ぶりに病室に姿を見せた。そして、お決まりの「ああ、疲れた！」のことは発せず、洗濯ものの入れ替えをしながら

「四月下旬から郵便ポストが使えなくなってしまっ……」どうして、と麻痺の残る口を動かして副島が質問しかけたが、それをまたずに

「シジュウカラが頻繁にポストに出入するので、覗くと、ひなが七羽もいたの……」そこで、注意書を作成し、郵便配達員や宅配業者にベランダの空き箱を指定したけど、これを読まなかった郵便配達員が、数通まとめてポストに入れたため、親鳥が巣に入れなくなり、親と子が激しく泣き、わたしがようやく気がつき、急いで郵便物を取り出し、小鳥たちは危機を脱したの。それで、今朝、七羽の子供たちは巣立ちの日を迎え、一言の挨拶もなく飛び立っていったわ」と、妻は話しの途中でテンションを高まめ、語り終えた。

妻がこれだけ長く話していったのは珍しい。妻は数年来《うつ病》の治療を続けているが、今日は調子が良いらしい。

――副島孝は脳出血で倒れて、ICU（救命緊急治療病棟）に二日間、一般病棟の二週間経て、リハビリ病棟で四十日間余り過ごしている。退院まで残り一ヶ月半余りである。

病状は、理学療法士の付き添いを前提に、右足に介助具を付け、左手で杖を突き、雨降り日はリハビリ室だが、それ以外は庭で三十分程度歩行練習をした。昨日は、病院前の横断歩道を渡る訓練もしたが、病棟では車椅子の生活だった。さらに、右手はじゃんけんのパーとぐうーの中間の形で、左手の援護を受けなければ何も出来ないでいる。

副島は自宅から遠い病院に搬送されたため（彼の家から車で四、五十分かかった）妻の負担が大きすぎた。妻は週一回洗濯物を持って病院に来る。だが、来院するなり「シユウ（愛犬）がひとりぼっちでいるから早く帰えらなくては……」と、一方的

に宣言するのが常だった。副島は同室の三人の患者の家族のように、毎日見舞に来ることは期待しないが、週に二日は来て欲しい、と思っていた。

この日、《二人の孫の近況》、《彼が意図する針治療を取り入れたりハビリ計画》と《病室でパソコンを左手打ち、「小説」を仕上げていること》を伝えたかったが、妻が再度《シジュウカラのエピソード》を繰り返したため、副島は断念した。

妻は「がんばってね」と、機嫌よく帰っていった。

妻は八年前から、「これから寝室を別にさせてもらいます」と一方的に宣言し、二階の一部屋を自室に改めた。以来、夫婦生活は一切無く、食事もバラバラに取り(副島は倒れるまで、家にいる時の食事は妻の分も副島が作った)―何よりも会話がほとんど無くなり、お互い口を開く時は強い口調で、およそ世間一般の家庭・夫婦とかけ離れたものだった。

この《家庭内離婚》が八年余り続いた後に、副島孝は倒れたのだった。だから彼に言わせれば、《妻のうつ病と夫婦の不和による、よほどな家庭》が総ての元凶だった。

―約四年前まで、副島は東京―山梨県を行ったり来たりの二重生活を、十三年続けていた。公務員であったから、山梨県に新築した家から通勤するのは無理であった……平日は横浜に住む娘の嫁ぎ先の一室を借りて、東京某区に勤務し、休暇はもっぱら山梨の家で過ごすようにする……金曜の夜に山梨に来て、土曜、日曜日は《庭の手入れや冬場の薪づくり》などの雑用をこなした。そして、退職後は、ボランティア活動でしばしば東京に出かけた。但し、その頻度が多すぎた。週二日はあたりまで、倒れる一ヶ月前は週四日が続く、倒れる八日前には風邪と疲労により、点滴まで打って、病院では翌日も治療を勧めていた―悔やんでも悔やみ切れない……《自殺》することが、障害を抱えて生きることの惨めさ、味わう苦しさを救う唯一の方法に思えた……病棟の六階の窓辺に立ち、何度も飛び降りることを考えた……だが、一つの言葉が心を決め、副島孝は今日まで生きながらえてきた。

《聖書の中に自殺を禁じている記述は無いが、自殺は最大の罪の一つ》

副島孝が住む市でも、若者の比率が超スピード減少し、超高齢化社会』が現出しつつある。市の高齢者対策の一つとして《元気老人づくり》がある……寝たきり老

人を無くし、高齢になっても極力からだを動かし、定期的に外に出てもらい、『趣味』や『交流』に生きがいを持ってもらう目的だ。『ふれあい広場』と名づけられ、月曜日から金曜日の平日に、市内五ヶ所で開講している。午前中に一時間半《手足のストレッチ、スクワップ（立ち上がり）、首周りを良くすることや転倒防止、腰痛防止体操》を行い、午後はレクレーションを行い、三時に帰路に着く。これらの運営と、老人会員の自宅と老人施設までの送迎を、委託を受けた介護サービス会社の職員が行っている。副島の仲間は八十歳後半が多く、最高齢は九十三歳に達していた。七十歳の副島が一番若かった。

三十二名の会員中に《独特の、他人がまねの出来ない人生経験》を積んだ人々がいることが分かった。副島孝は病後の《生きる》目標を定めきれないでいるなかで、ふと沸いたのが《これ等の人物》を密かに描くことだった。

二、来世に持参するものは……長谷川君子女史

コスモスは山口百恵のイメージと重なって《可憐》で《幾分きゃしゃな花》と思っていた。だが、田舎暮らしをするようになって、この花の《正体》を知ることとなった！

初夏に庭や畑の脇あるいは道端に見かけるコスモスは、雑草に取り囲まれ、今にも消えてしまいそうだ。それが、盛夏には背丈を伸ばして、雑草の中から飛び出し、初秋には雑草や他の草花が序々に勢いを失うなかで、たくましい茎に、見事なつぼみ・花を付けて文字通り『秋の女王』として登場してくるのだ！ 副島が都会から田舎に来て、最大の驚きが《コスモスは野生そのもの》と知ったことである。

未だ残暑が残る九月中旬のことだ。『ふれあい広場金曜』は、十二時から一時半まで食事と休憩時間だ。女性会員の十五、六名は座敷にふとんをならべて午睡中である。

八十七歳の長谷川君子女史が独り読書をしている。

女史は前武川村の唯一の映画館を昭和三十二年に起こした。夫を立てて社長に据えたが、自ら『映画フィルムの選定』『価格の交渉』に当たった。土地柄「時代劇もの」

が好まれたが、女史は配給会社に出向き《社会派》《文化香りがあふれる》のフィルムを安く廻してもらおう交渉をした、と言う。

昨年、会員となった長谷川女史が『ふれあい広場金曜』の場で、《劇的な再会・五十数年ぶりの再会》をした人物がいる！ その人は石本孫市氏である。氏は長谷女史の経営していた映画館の元従業員であった。そして、長谷女史にとっては子息の命の恩人であった。

―昭和三十四年八月十四日早朝、台風七号が静岡県駿河湾付近に上陸、富士川沿いを北上し、猛烈な暴風雨を伴って山梨県を襲った……南アルプスの甲斐駒ガ岳の麓に位置する武川村と隣接の白州町は特に悲惨だった……釜無川（富士川）の支流である大武川が、山崩れによる多量の土砂と流木を交えた濁流となり、やがて、いくつかの箇所で氾濫し、民家が濁流に飲み込まれ、多くの家も人々も家畜も流された……村の中心地である国道二十号沿いも、上流の堤が切れて、傾斜によってさらに勢い強くした濁流が襲った（統計によれば二つの自治体で二十三名の死者を出した）。

―旧盆に併せて、長谷君子女史の経営する映画館は、十五名から成る芝居グループを呼び寄せていた。時計が八時を廻った直後、緊急を告げる半鐘が鳴り《大武川の堤が破れた》の報がもたらされた！

女史は劇団の人々をたたき起こし《野外の避難が続く怖れがあるので、身支度をしっかりとすること。個人々々で重要なものの携帯》を注意し、一キロ先の高台に避難指示をした。

堤を破った濁流の先頭は村の中心地に到達していた！

女史には当時六歳の長男がいた……子供を石本孫市氏に託し、車で高台に逃れるように頼んだ。石本孫市氏は激しい風雨の中、冷静な行動で子供を高台まで引率し、居合わせた長谷川家の隣人に一時的に子供さんを預けて、また映画館に舞い戻る途中、濁流から逃れた女史達一行に行き会った、と言う。

台風七号によって、女史の自宅と映画館は床上浸水し、映画館は休業の憂き目となり、長谷川夫妻は映画館の再建を諦めて、村（その後町となる）の中心地で「化粧品、雑貨店」を開き、ほぼ順調に営業した。

一方、石本孫市氏も農業に戻り、その後、村に起こった企業に勤めたりした。石本家は周囲が文字通り田んぼと畑の間にあった。同じ村内で、しかも、およそ五キロしか離れていなかったが、この距離はとてつもなく遠かった！ 長谷川女史と石

本孫市氏が、遠めに行き違うこともあっても《再会》は五十三年の年月を要した。

だが、この劇的再会も長く続かなかつた……石本孫一氏が風邪で休みます、と教室に発表があつて三週間後、彼の訃報がもたらされた。風邪をこじらせ、肺炎を併発させ八十二歳で逝去した。副島は彼の元気な様子から信じられないで呆然とした。そして、長谷川女史の落胆ぶりを観察しようとしたが、女史は休みであつた……女史の元に訃報がもたらされて、静かに喪に服しているのだろう、と副島は思った。

石本孫一氏の死から二週間後の『ふれあい広場』の昼休みのロビーである。

「この図書館から借りた本、二週間からかつて、まだおわらんさ！」

「題名は？」

「藤沢周平の『蝉しぐれ』だ」

「わしは未だ読んでない。今度借りるから、はあく、読んでこーし」

四人の男性が甲州弁を交えて話している処に、長谷女史が「ごめんなさい！」と断つて雑談に加わつた。女史との会話は、近くで比較的大声を出さなければ聞いてもらえない。自分で話す場合時も大声気味だ。

「最近、DVDで『蝉しぐれ』見たけれど、最後の場面……物語の主人公と藩主の側室になり、藩主の死を機会に尼になる決心をしたヒロインが、最初で最後の『具体的愛』を注ぐ決意をして、主人公を寂れた温泉宿に招く。あくまで、お忍びであつて、ヒロインの決意を知る者は二、三人に限られているのに、仰々しい御付きの列……これで不倫できる？」と、女史は疑問を提出した。さらに、女史は男性陣からの回答を待たずに

「映画のお話をしましょう。宮田英一さんはどんな映画が好きですか？」

「クロサワの『天国と地獄』それと『七人の侍』かな……彼のそれ以降の作品は失敗作が多い！」

「俺は『寅さん』だ！」と小田さん。女史は《会話のペース》を握っていた。

「十二、三年前に見たB級の映画だったわ……題名は『ドクター』よ。青年医師が、末期脳性ガンで余命いくばくかの若い女性患者がいる。担当するこれまた若い医師は何とか助ける道はないかと探し苦悩し、いつしか医師は女性患者に恋をするの。彼女もそれに応えるの。女性は残り少ない人生を、精一杯生きる努力をし、自暴自棄にならず精一杯生きるの。美しいじゃない！ 比較的体調の良い時に郊外に

デートもするの……明るく振舞う彼女を見て医師はさらに《医学・医療限界》に悩む……女性は医師に諭して言う。『天国には美しい思い出しか持っていないから、わたくしはこの瞬間を懸命に生きているの』……この場面、この言葉に感激したわ。やがて診断通り、女性はしずかにこの世を去るの……泣けたわ。ジ・エンドになって、場内が明るくなっても涙が止らないの……それ以来、『天国には美しい思い出しか持っていない』と云う言葉を、座右の銘にすることにしたわ」

「良い映画らしいね。わしはもっぱらテレビで『水戸黄門』さまさ。新作は作らないと言っているのは寂しいかぎり」と、小坂さんが述べる。七十七歳の山内幸男さんが、手前にあつた湯呑み茶碗をテーブルの真中に移動させた後に

「自分は韓国ドラマにはまっている。孫が、おじいちゃん、独りの生活は寂しいから、これ見て、と百枚以上のDVDを送ってくれて、見ているうちに病みつきになっちゃった」

長谷君子女史がすかさず「韓流ドラマ論」を展開した。

「韓国ドラマは週二回放映されるシステムで、脚本家、制作する側、出演者の皆さんが大変であるの……だが、一番の苦痛を感じているのは見る人々であると思うの……第一に、ドラマを短いので十数話、長いドラマは七、八十話で、これをつなぐ（もたせる）ため、脚本家の手法が見え見えよ。例えば或るカップルがいるとする。それぞれの家族が絡み、それも《儒教の国》らしく、威厳を示す父親、母親に加え祖父母それに母親、父親の兄弟姉妹、叔母や叔父が登場する……結婚式の日取りを決定するのに、本人の存在を忘れて舅、小姑が騒ぎ立てる……それで、一話で終わるドラマが二話、三話となっていくの。しかも、『回想』場面がやたらに多く《時間稼ぎ》の観は否めないわ……人物の絡みが同じ平面で何回も繰り返され、まるで《紙芝居》を見ているよう……立体感がないのが欠点だわ。それと、日本映画にもしばしば取り入れられた《欧米コンプレックス》がしばしばあるわ。《都合の良い時、悪い時》に、主人公は欧米に留学あるいは研修で脱出する場面が多すぎ！

滑稽なのは、レストランなどで男と女が会う時、赤ワインが出てくる……これって……《韓国も欧米なみで、男女の語らいの場にはワインが付き物です》、と強調しているみたいで嫌だわ。もちろん優秀作品も多いわ『ありがとうございます』や『パートナー』を、わたくしは推薦するわ」

韓国ドラマ通の山内さんが、ドラマで描かれている儒教社会の疑問を投げかけた。

「韓国の大家族が寄り集まって、しかも、その中で『家長』の親父がいばりすぎるじゃんけ（じゃないか）……年上の人を敬う、と云うことは大変結構なことだ。ただ、未だに男尊女卑の実体や、大酒飲みの親父、博打うちの父も懸命に息子、娘が支える姿は、ドラマにしても矛盾を感じる……そんな親には子から放逐しろし！（しろよ）」これまで黙って聴いていた宮田英一さんが

「韓国の社会文化を理解するには、儒教を勉強しざあ（勉強しよう）」と、静かに述べた。

話が大変面白い展開を見せたところで、一時半が近づいた。今日のところはここまですなつた。

三、大陸を疾駆する亜細亜号に夢をかけた少年……田中四郎氏

『ふれあい広場金曜』の参加者の中に、「ひよこ」を育てて四十年になる人が存在する……現在、八十九歳でもなく九十歳を迎える田中四郎さんだ。

「ひよこ」の総数は約一万羽だそう。約三ヶ月かけて育成し、卵を生む直前、養鶏業者に引き渡され（売られ）また、生まれたての「ひよこ」を育てる作業が始まるそう。育成場に来る前、卵から孵化し、大人の手のひらに隠れるような状態の時、弁の先をほんの少し切断するそう……すこし大きくなって、仲間どうしでつき合いたで怪我をしない予防措置で、設備が整っており、作業になれた若い人がいる名古屋で済ませてから、ここに搬入とのこと。育成場は人里から離れた山の中腹にあって、動物や野鳥の侵入に気を使う……つい最近、熊が金網を破り、かわいそうに、ひよこは内臓を食いちぎられ、無残な姿だったそう。二日後、加害者らしいメス熊は、育成場近くでワナにかかったが、その熊は山に放たれた。野生動物保護団体の意見を取り入れたそう。

「犠牲になったひよこたちは報われない！ 加害者が過剰にガードされ、保護を受けて、被害者がやられたままの人間社会と同じじゃんけ（じゃないか）」と激怒していた。

管理責任者の田中四郎さんの他に、田中氏の長男と二名の外国人がいるとのこと

だが、

一万羽の「ひよこ」には細かく気を配り、予防注射なども、両足をすばやく持つてやるそうだ。ごくまれにオスが検査を潜り抜けて混じり、育っていく過程で、とさかが何となく違い、声も明確に違って分るそうだ。順調に育ったメスのヒナたちは、三ヶ月過ぎた頃に、鶏冠がより赤くなり、そうなれば養鶏業者（ほとんど個人経営者はおらず、資本を持った法人に）に売買される。値段は一羽三千〜四千円の間だそうだ。

ちなみに、処分に困り果てていた養殖カキの殻は、その後技術が進み、殻を細かく砕いて鶏のえさと混ぜられ、より栄養価の高い卵となり、卵のカラーも丈夫になったとのこと。

養鶏場では、それぞれの鶏がほぼ毎日卵を産みつけ（鶏の腹には翌日生む一センチ大の卵が待機し、さらに翌々日、その次の分がより小さく待機しているそうだ）、約一年で任務を終了すると言う（卵を生まなくなる）。そうなれば、それらの鳥たちは五、六百円で焼き鳥業者に引き取られる、とのこと。

田中四郎さんは、文字通り四番目の男の子として生まれ、左官業の父の仕事も兄二人に任せ、比較的自由に幼年・少年時代を過ごした、と言う。父の弟さんは南満州鉄道社員として大連に渡っていた。妻の父親の葬儀に遅れて参加した際に、叔父さんの話が聞けた……特に、大陸を駆け抜ける蒸気機関車『亜細亜号』は、世界随一といわれた流線型列車で、豪華な展望車の話と写真は田中少年を一気に大陸へと駆り立てた！

そして、中学を終えると叔父を頼って大連に渡った……叔父の口利きで『機関車のかまたき』の仕事を得た。あこがれの第一歩を踏み出した。

「かまたき」と言うが、これが難しいのだ……かまに石炭を入れる場合、口の中央を起点して、左の奥の方と手前側、右の奥の方と手前側、そして中央に放り込む練習をして、千点満点で八百点以上とらないと「かまたき」に採用されないのだ！……毎日々々、一生懸命練習した……その甲斐あって八百六十点とって合格し、正式に「かまたき」に採用された！大陸を駆け抜ける蒸気機関車『亜細亜（アジア）号』の運転手の道は拓けた訳だが、その前の苦労は延々と続く……貨物列車の「かまたき」、鈍行列車の「かまたき」が待っていた……しかも、機関士、機関士助手、

助士の次ぎが「かまたき」さ。でも、おれはくさらず「かまたき」を続けた。『亜細亜（アジア）号』の機関士を夢見て。

—戦争が何もかもかえたのさ……戦争はいかんぜ！ わしの夢を奪い取り、戦場に駆り立てた……わしが兵隊にとられたのは戦争末期だった……配属は海軍だった……世保の基地で、飛ぶ飛行機も少なくて、代わって、乗員一人が潜望鏡と簡単な航法装置を頼りに操縦、乗員もろとも敵艦に体当たりする、特攻兵器『回天』が俺達を待っていた……生還の可能性があることが、それ以前の特種潜航艇とは違っていた。「鉄の棺おけ」と呼ばれ、乗員一人が乗り込むと外から入り口を閉じて、万一、敵艦に体当たり出来ず、島に流れついても絶対に外に出られない構造だった！……わしは出撃の順番を待つ身だった……八月二十日が出撃の日と知らされた直後に終戦を迎えた……。

—喜びなんてなかったさ！……頭の中が空っぽになり、手当たり次第に物を投かけて、気を晴らそうとしたがだめだった……次にやったことは、同期と酒をしこたま飲んで暴れ、今や上官ではない連中を、何人か叩きのめしたのを覚えている。全く戦争はいかんぜ！

田中さんの復員後の詳細はまだ伺っていない。が、特攻隊員に選出され、終戦を迎えて、間一髪生き長らえた若者たちと同様に、しばらく『荒んだ生活』を歩んだに違いない。それをどのように軌道修正し、山の中で「ひよこ」を育成することになったのか？

田中四郎さんは三十三歳で、同じ村の独身女性とお見合いをして結婚となった。そして、男の子を授かった、と言う。残念なことに、妻は四十七歳でこの世を去った、と言う……クモ膜下出血で、当時、村の医療が適切に対応できていない、との評価もあったらしい……。

田中さんは悲しみに明け暮れ、隣接の町で飲みまくり、一升近い深酒をして、帰宅は深夜なり、三千円もかかるタクシー代を使い、荒れた生活ぶりが評判になった、と当時を振り返って苦笑した。これは想像だが、それだけ妻を深く愛して止まなかったのではないか。

四、回想のS女史

十月中旬を迎え、『ふれあい広場金曜』は、『紅葉狩』の行事を実施する。車ごとに六、七名が分乗し、計四台で清里に来た。

美しい紅葉は、日中と夜半の寒暖の差が激しいことであるが、今年はこの条件をクリアし、もみじ、ナナカマド、カエデ、うるし、の鮮やかさが目立った。

紅葉の鮮やかな箇所を見てから車は南清里のレストランに着き、そこで食事となった。皆さんが暖かいうどん定食やカレーを選ぶ中で、副島のみは冷たい大盛りそばと、自製のクロツケの揚げたてを頼み、皆を驚かせた。夏でも冬でも、蕎麦は冷たいのが良い、が副島の持論だ。

レストランの食事が済み、午後一時半近くに、清里の中心地に到着し、一行は《名物のアイスクリーム》の買い求めの列を作った。副島は杖を突いて並ぶのが面倒で、また、誰かに頼むことも嫌であったから、近くのベンチに腰掛けて周辺を眺めていた。この時期、午後の風はもう寒さを含んでいるが、この程度は我慢の範囲である。

―副島にとって、「清里」の周辺は忘れられない思い出がある……私自身、この地は好きでも嫌いでもない、ごく普通の観光地として捉えていたが（今でもそうだが）、親しく交流していた中国人女性がこの地を熱望して止まなかったため、今日と同じように、全山紅葉の中訪れた。かれこれ二十年も昔のことだ……落ち葉を踏みしめて散策している最中、彼女は（S女）突然質問した。

「日本人は、様々な秋を楽しみながら、行く秋を『もの哀しい秋』に捉えるのはなぜですか？ 中国人は《秋を哀しい》とは感じません」

突然だったので、動揺しながら、副島はこう答えた。

「春に木々が新芽をだし、夏に葉も幹もピークの成長をし、秋の深まり紅葉し、同時に、次の春に向けての準備をする……この《次の生を受けるための死》を見ようとせず、日本人は、落葉だけを捉えて悲しみを見出すのかな。それに、晩秋の午後から吹く冷たい風が、日本人の心をそうさせる、と思う」

―細い身体、長い髪の毛、眼尻がやや上がった眼、なめらかな頬、足のきれいな

人だった。結婚していたが、子供はまだいなかった……S女の夫は病的なほどに浮気をした、とのこと。それも一つ二つでは止まらず、S女は、冷却期間を設けるためと、夫の両親を説得して、日本留学を決意した。二十八歳の時であった。

北京の名門大学の卒業生故に、直ちに、東京の某大学の留学生に決まった……来日の数ヶ月後、私は、ある交流会でS女と知りあい、名詞交換を行った。当時、副島は東京某区で、地域に開かれた「中国語教室」の責任者だった……S女の学歴と、語学教えるセンスを感じ取り、その場で《中国語教室講師をやってみる意志はありますか》と訊ねた。S女は満面に笑みを浮かべて承諾をした。

S女は、期待に込めて能力を発揮し、定例日の講師以外の日に、クラスの枠を取り払った「自由会話」クラスを活発な教室に変身させた……日本の中国語学習熱は、天安門事件の後に、落ち込みが激しかったが、私達が推進する「中国語教室」は、そんな減少傾向はみじんもみられず、むしろ中国語学習者は増加していった。拡大できた要因の一つに、S女の指導力があった、と分析していた。

―ある時（多分、一九九四年の六月中旬だったと記憶している）、S女と『天安門事件』の評価について論じ合った。

「……もしも、一九八九年、鄧小平の指導がなく《政治空白》が長引いていたとするならば、十三億人民の混乱が引き起こされ、その混乱は、ソビエト連邦における共産党独裁政権崩壊の混乱の比ではなかったでしょう……考えるだけでもぞつとする。別の言い方をすれば、ソ連共産党と中国共産党の決定的違いは《党の指導力》の差と《人民の支持》の差にあった……十三億人民の中での《数千万黨員》は、少ないとの見方がある。しかし、十三億人民の中に入り込み、基盤をもった党であったからこそ危機を脱することが出来た」

「町田先生（中国語の先生は「さん」の意味）は中国共産党の一角独裁を評価するのですね」

「あれだけ広い国土と、五十六民族・十三億の国民をリードするには《秦の始皇帝か毛沢東が持った絶対権力をふるってしか統治・統合できない》との説を、私もとる。だが、歴史を逆行させることは出来ない。大きすぎる国土と人民から派生する『政治』『経済』『社会』の諸々の課題は、他国の比ではない……欧米の民主主義の取り入れが最善ではなく、

中国共産党の力を保ちながら『国家主権』『軍事』『外交』は中央政府が引き受け

るとして、現在の省や自治区を基礎に、そこに、中華人民共和国から『分権』して、ゆるやかな『連邦制』の選択がなされるのが、ベターではないのかな」

「欧米の民主主義をそのまま持ってきて、中国国民のお腹が一杯になるなら、やってみて、と鄧小平は言ったことがあります！」

「革命の本家であるソビエト連邦において、国民はほとんど最近に到るまで、極寒の中でも足踏みし、数時間待った結果、僅かの食料を手にした。だが、長時間待ったのに、手にすることが出来ないこともしばしば起こった！ こうした現状を改革することなく、ソビエト連邦共産党はバラバラになり、自壊の道をたどり、政治、経済、社会を混乱させた……『天安門事件』の翌年、私達は中国のいくつかの都市を訪問しました。気がかりだった、民衆の表情は落ち着いていた感じで、市場には活気があり、いわんや食を求める行列など皆無だった」

「先生の冷静な分析に敬意を表します。中国人民の一人として感謝します！……わたくし、実は中国共産党員です。父が『人民日報』の幹部でした。その影響で共産主義青年同盟に入り、ある地区の幹部を務め、二十歳で党員になりました……外国において中国共産党の評価を受けるのは初めてです。党員の一人として、少し自信がもてました」

「貴女のように、若くセンスの良い若者がたくさん入党すれば、中国共産党は万万歳だ」

「もっと経験、体験をつまねばなりません！ 未だに中国共産党は農村に基盤を持った党です。その農村は、人口が多く、貧しく、辺境地区では小学校も行けない児童がおり、都市との格差が広がる一方です。私も農村に入る決意をしかかっています」

「加油！ 加油！（がんばれ！ がんばれ！）」

「私は、地方の辺鄙な農村を選んで、そこで活動します！ いつか、町田先生も訪ねてきてください。手紙でその地方を詳細に知らせます」

「体を整えて、その日を待っています」と。その時はこんな会話で終わった。

—S女の日本留学は、六年数ヶ月に及んだが、健康面で多少不安があり、日常的には貧血気味で、時々、病院通いもした。私は貧血改善のための食事をいくつか提示し、造り方も伝授した。更に、寝る前にワインをたしなむように勧めた……《ワイン伝授》初期の頃、日比谷のイタリアンの店に行ったことがある。二杯目のワイ

ンに少し酔ったS女は

「副島先生は《一杯のワインが、人生をチョピリ楽しくする》とのフランスのことわざを教えてくださいました……わたくしは思うことがあるのです……なにもかも捨てて、全く違う世界で生きられたらどんなによいかと！」

—私は少なからず動揺した。《なにもかも捨てて、全く違う世界で生きられたら》と述べたことの意味を反芻してみた……帰国して《辺境域での学校教育、特に、未就学児童の根絶に取り組む》ことへの戸惑いか？ または中国共産党員として活動していくのに懐疑的になったのか！ それとも、以前として続く家庭問題？

私は、S女の発言をそれ以上取り上げることは止め、さしさわりの話へ誘導したことを覚えている。

—日本留学六年数ヶ月に達して、S女は博士号（教育学）を習得し、一九九七年に帰国した。私は《事前の予想》に反して、S女の帰国に、大きな落胆・動揺もせず比較的冷静に受け止めて、成田空港まで送っていった。

帰国後数ヶ月して、活動の場を寧夏自治区銀川近郊に移し、少数民族の文盲の根絶、全児童の就学に取り組んでいる旨と、ぜひ銀川観光においでください、との手紙をもらった。

それから二年後の夏に、私は中国語学習者訪中団を募集して銀川観光に赴き、同時にS女との再会を果たした……あのほっそりした体型は幾分改善し、なによりも日焼けの顔、手足が健康を語っていた。

観光は、盛夏時代の遺跡や、ラクダに乗って砂漠を横断すること、黄河上流を昔通り、豚の腸を膨らましたものをつないだいかだに乗ることなどを体験した。

銀川を離れる前夜、私は密かにホテルを抜け出し、S女の執務室を見学した。執務室の正式名称は『中国社会科学院銀川分室』となっており、銀川中心街よりやや離れた中古のビルの一階に在った。同じ建物の五階に自宅があると言う。執務室内には電話、ファクス、印刷機等が備わり、狭いスペースながら、快適なオフィス環境、と見た。パソコンはまだなかった。このオフィスには、S女をキャップに二人の正式職員と、三名の少数民族の若者が臨時に雇われ、近隣の村や辺境地の実体調査の任に当たっている、と説明を受けた。

私は、『辺境地の教育』に身を投じるS女の将来に《なにか役に立つことを》考え、彼女の意見も聞いてみた……その結果、児童が大人になってからも役立つ『中文辞

典』を贈ることに決めた。日本に戻ってから、S女の受講生たちに支援を求めることとして、一冊約五十元として、今年度分として、二十冊分の日本円を手渡した。

一時間後別れの時だ。互いに歩み寄りハグをした。S女のそれは強いものだった！私も強く返した……ハグの範囲をオーバーして数分抱き合ったが、ふたりにはそれ以上のステップは必要なかった。S女はすこし赤くなって

「ありがとうございます。また、銀川においでください！」と述べて、今度は手を差し出した。

—S女は、寧夏時自治区で、少数民族の文盲の根絶、全児童就学達成に大きな成果をあげて、二〇〇三年に『中国社会科学院』に戻った。だが、自ら願って出て、数ヶ月後には四川省成都に赴任した。四川省にも少数民族が多数存在し『辺境地の教育』の課題が山積している、とメールで伝えてきた。

それ以降、週一回以上のメール交換を楽しみにしたし、二〇〇五年に私は三次目の「中国語学習者訪中団」を募集して、成都、重慶、長江下り、武漢、上海を訪問した……S女は、わざわざ成都の空港に出迎えたばかりか、その夕方、団の夕食は、宿泊するホテルのレストランであったが、S女の提案で急遽、四川料理の老舗となり、少々辛かったが、格安の料金で味あうことが出来て団員一同大喜びした。さらに、S女は翌日の成都市内観光にも同行してくれ、団員たちの余り上手くない中国語にも、満面の笑顔を見せて中国語で答え、一同から感謝された……この成都での感激のシーンのひとコマひとコマがまぶたに浮かぶ。だが、この日の夜の成都空港見送りに来たのが、S女を見る最後となった！

二〇〇八年五月十二日、四川省 マグニチュード七・八の大地震があり、死者・行方不明者は八万七千人を超え、負傷者は三十五万人にも達した。

そして、S女は綿陽市内の学校訪問中、建物が倒壊し、その下敷きとなり亡くなった……大地震発生後にメールを打ったが、哀しい知らせは十三日後に届いた。日本語が出来る同僚からだった。

その後、S女の遺体は見つかったのかの問い合わせのメールを、日本語を解する同僚に送信したが、回答の無いまま月日が経った。そして、副島も倒れる事態になり四川省綿陽市訪問もできないでいる。もう少し足の運びが良くなったら、S女に会いに行くつもりだ！

「ふれあい広場の仲間の皆さん！出発しますので、車に乗ってください」との大声が響いた。時間はいつも間に午後二時半を過ぎていた。

五、時代を切り拓いた愛……宮田英一夫妻

副島孝にはトラウマがあった……小学校四年生の時、元中国中支派遣軍の陸軍中尉が先生となって彼の小学校の、しかも、同じ学年のクラスの担任として現われた。そいつは直ぐに大声で生徒を叱り、体罰を加える嫌な奴だった……学期末の時だったと思う……受け持ちの先生に言いつけられ、クラスの余った椅子・一脚を隣なりのクラスへ運んでいった。未だ授業中だったが、副島少年は椅子を抱えていたので、椅子の足でドアを叩いた。だが、中からは応答がない。戸惑っているところに、運悪くかの元陸軍中尉が通りかかった。《授業の邪魔をした》、と一方的に決め付け、往復ビンタを数度くらい、涙を堪えて、椅子を抱えて自分の教室に戻った。

それ以来、学校の廊下等でその先生とすれ違う時に、自然に体が強張るのだった……夢の中でも殴られ、叫び声を出して家族を起こしたこともあった。

やっと中学生になり《悪夢》は去った。それとともに、今度は《復讐プラン》をあれこれ副島少年考える日々が続いた。結局、《復讐》は神に委ねることとなったが。

八十九歳の元海軍少尉の宮田英一さんは、身長が百七十三センチあり、高齢になつたいまでも《若い時はさぞかしハンサムだったろう》、と思わせる風貌を残している。

宮田さんは、太平洋戦争勃発当時は海軍兵学校に学んでいたが、翌年卒業して、準尉で任官し、半年後に少尉となり重巡艦（確か大淀だったと、と記憶しているが）で転戦した。そして、マニラ湾に補給等で停泊している際、米軍の空襲を受けて艦艇は座礁し、自身も負傷した（今でも左手が少し不自由）……病院退院直後、宮田英一少尉は陸戦隊の小隊の指揮をまかされた。

マッカーサーがフリッピンに再上陸し、圧倒的な軍事力・火力の前に「マニラの市街戦」で日本軍は敗北し、宮田少尉の小隊もジャングルの奥へ奥へと逃げ回る日々を過ごした。ジャングル戦では友軍と合流して戦ったが、飢え、マラリヤ等の病気を

と米軍の攻撃で、戦友はバタバタと死んでいった……やがて、日本軍内部で《徹底抗戦派と降伏派》との争いになり、徹底抗戦派がさらに奥地に逃げていくのに対して、宮田少尉は米軍への使者となり、武装解除を行って米軍の捕虜となって生きながらえた。

復員してきた宮田英一氏は、しばらく休養した後、美術学大学に復学して、昭和二十八年に卒業し、直ちに横浜の私立女子高校の美術を教える講師になった、と言う。

講師になって二年次に《彼にとって運命の人》大川桜子さんが入学してきた。

当時、男女共学の高等学校は少なく、高等学校、大学に通う女子は多くなかった。戦後民主主義も少しずつ定着し、《食べるが大変な時代》から《どうにか食べられる時代》に移行し、朝鮮戦争特需もあって戦後経済から脱却しつつあった。

大川桜子さんは、そんな時代の申し子で、明るく活発な生徒であった。学校では女性徒たちが寄ると触ると《ハンサムな宮田先生》のうわさが絶えなかった。大川桜子さんも週に一回の美術、絵画の授業を待ち焦がれ《身だしなみを整え、特に髪を念入りにして》臨み、授業の十五分前には、前三列目の中央座席を占めた。それがいつしか宮田先生も気にするところとなった。

一年生の夏休み期間中、宿題の一つに《絵を描く》のがあった。大川桜子さんは、まだ夏休みが終わっていない八月中旬の真夏日に、学校の職員室を訪問した……宮田先生が当直で職員室に詰めていることを知っていたのである。山梨の祖母から送られてきたぶどう二房を持って。

大川桜子さんの描いた絵は二枚あった。いずれも自画像であったが、何とその内の一枚は湯上りの若い女性の上半身画で、胸の部分はタオルで覆ってあるが、それでも胸のふくらみは描かれており、タオルからこぼれた胸の一部の膨らみも描かれていた。

「どちらを提出したら良いのかわらなくて、先生にご相談したいのですと、大川さんはきっぱり述べた。先生は少し赤くなり、体に似合わない小さき声で

「きっと早すぎるよ……時代が十、いや二十年後だったらなんでもないだろうに……」

「それって、こちらのセミナード画のことですか？」

「そうですよ……」

「もう一枚の、自画像は批評なさっていただけなのでしょうか？」

「上手に描けています」

「じゃーどちらにしようかなー」と、桜子さんは絵を交互に見て、同時に、先生の反応を、ちらりちらり確かめたのであった。

この時から、『先生と生徒の関係』は微妙となり、まもなく桜子さんが宮田英一さんをリードする展開となった……学校関係者や校友にバレないように「先生の下宿」や「桜子宅」に絵の勉強をしながら交際が深まった。そして、桜子さんの高校卒業しい一年後に、めでたく結婚となった、と言う。

ご夫妻は、今でも新婚時代の雰囲気を残しながら、白州町の外れのログハウスで生活している。お子さんは娘さん一人で、名古屋在住で離れている。その孫娘との週一回の電話連絡が楽しみ、と語っていた。

六、さくらの季節

日本ではいつの頃からか、桜の季節に人々の往来が激しい。ピカピカのランドセルに隠れてしまいそうな小学一年生を始め、進級、進学する生徒たち……その直前に、そこから巣立っていった人々がいた。彼等は上級の学校で、さらに学業を磨く人々や他方、社会人としての一步を踏み出す若者たち。

それとは逆に、定年を迎え、静かに第一線を去る者がいる。

副島孝は、さまざまな感慨を与えてくれる、この季節がとても好きだ！

『ふれあい広場』でも三名との別れが発表された。スタッフの香田由梨さんの転出は、ある程度噂されていたので、衝撃は少なかったが『ふれあい広場金曜』の人気者二人の退会が発表されて、副島は驚きの声を上げ『まじかよ！』と叫んだ。

宮田英一氏は足腰が弱ってきて、自宅のふろを使用するのに、奥さんの苦労が大変だと聞いていた……体が大きいので、妻ひとりでは支えられず、市の担当者との話し合いで、「介護サービス」に頼り「週二回、町の温泉に入る」のがベストの結論を得たと言う。

もうひとりの高村弘子さんは、先月行った『体力測定、記憶力、判断・認識力』のテストの結果《一般の老人以上》と判定され会から抜けるのである……七十代中頃の婦人としては背が高く、体全体もふっくらしていて、どこか気品を感じさせる人だ。

『八〇二〇』の言葉がある。八十歳になっても、自分の歯が二十本残っている（義歯、差し歯は除いて）、と言うことで、高齢者の健康状態のバロメーターとなっている。

高村さんは虫歯や義歯は一本もなく、二十八本の永久歯が揃っている。百人に一人が存在するかどうかの確率だ。この状態を維持するため、朝晩三十分ハブラシを《裏側、表側》とも丁寧に行うと言う。

また、高村さんは八年前に「詩吟」の勉強を村のサークルではじめて、たちまち才能を発揮し、講師をしていた元大学教授からお墨付きをもらい、サークル仲間や村の職員から「詩吟講師」で呼ばれるようになった。そうした経過も知っていなかった副島孝は、芸者の経歴がある、と勝手に思い

「どちらのお座敷に出ていたのですか？」と、ピンボケな質問をして、大声で笑われた。

香田由梨さんが、市より受託・経営している会社の移動基準によって、市内の老人ホームの係長に転出することになった。

彼女は、長野県白馬村の出身で、高校生まで地元にはいたが、福祉関係の勉強を目指し、横浜市に出て郊外に寄宿し、高校、福祉短大に通った、と言う。推定年齢は四十三歳頃で、未だ独身である。一般的に申せば《容姿十人並で、グラマー、陽気すぎる性格、バイタリティあふれる人》で、いわゆる結婚適齢期女性が、《売り手市場》である日本社会の中で、これまで独身を通すとは《何があったのか？ 何がそうさせたのか？》を考えさせるのである。

香田さんと副島の対話は送迎車の中で始まった。こんな風に。

「白馬（しろうま）の出身ですか……いまでも四谷駅はあるのですか？」

「ありませんよ。はくば駅です」

「昔の山男は『白馬は』しろうまであって、「はくば」と大声で言っている、山登りスタイルのお兄さんやOLを《素人だ》と軽くみたものです」

「へーそうずらー！」

「あんな良い所から出て、横浜―そして山梨に住む感想はいかがかな？」と、意地悪な質問をした。彼女は一瞬度感ったがきっぱりと言いつつ切った。

「今でも母は元気で、妹を手伝わせながら食堂をやっているのです。私も年間二、三回は里帰りですね……なんと言うのかな、白雪を抱く山々、山麓の四季の移り変わり、冷たい川の流れ、春から夏にかけて花々の華やかさ、そういう元風景が目についでいるので、どこへ行ってもがんばれるのです」と。

香田先生は体操を始める前五分間に、または午後のレクリエーション開始前に《漫談》をしばしば行う。自分の母より遙かに年上の男女に向かい《持ち上げたり、下げたり》その間合いを取り、こんな風に語りかける……上手だ。

「みなさん！ いいけ。朝、目を覚まし、掛け布団をどけて、まず寝たまま出来る体操をしろし！ ほんの二、三分間毎日やる！ それから、ズロースを取り替え、靴下を履き、キリとして起き上がる。そして、冷たい南アルプスの天然水で顔を洗い、すがすがしい気分でご飯に向かう。いいけ！米のめしをいっぱい食べるし。」

今から八年後に、東京にオリンピックが来るかもしれない。その時、全国を聖火ランナーが走る……山梨県では皆さんの出番だ！ 最高齢者の松山さんを聖火ランナーにおつたてて、その他は、応援ランナーとして松山さんの後ろを、五十メートルでも走るだ。ゆっくりと、倒れそうになっても完走しろし！」

老人たちは、香田提案を軽く笑いながら聞いていた……その表情から《それは無理だね》と、大部分の老人たちは思っている。

でも、《かすかな夢》として心の片隅に置き、それを時々取り出して欲しいのだ！

《夢は、時々出会う苦しみを包み込み、勇気さえ与えてくれる》ものだから。